

「華岡青洲」に関する最新の情報

Recent Information on Seishu Hanaoka's Achievements

*松木 明知¹

*AKITOMO MATSUKI¹

1. 弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

1. Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

日本の麻酔科学は華岡青洲に始まる。青洲は1804年に世界で初めて全身麻酔薬を投与して外科手術（乳癌腫瘍摘出術）を行って、全身麻酔法、選択的手術の道を開拓したからである。術者、患者、手術、期日、手術場所が特定され、正確な記録が遺されている点で世界初である。米国のW. Morton、英国のJ. Snowに比肩される。このため日本の麻酔科医は、青州の事績を正しく理解することが求められている。しかし、現在、医療関係者の間で理解されている青洲に関する知識は甚だ誤謬に満ちたものであり、一般の人々の間にも誤った見解が浸透している。このような謬見は、先行研究者が原典を十分に読み解かず、噂や俗説を根拠として作り上げたものである。青洲最大の業績は、約20年の歳月をかけて全身麻酔薬を開発したことである。これまでその麻酔薬の正式名が「通仙散」であり、別名が「麻沸散」とされてきたが、これは誤りである。青洲自身「乳巖治療録」の中で「麻沸散」と書き、門人たちも「麻沸散」ないし「麻沸湯」と記録しているからである。「散」は散剤を意味する。散剤の「麻沸散」は嘔吐を誘発し易く、麻酔の効果が減弱するため後に煎剤として使用されるようになり、名称も「麻沸湯」とされた。「通仙散」の名称は青洲の没後、「春林軒」の分塾「合水堂」を主宰した娘婿華岡南洋が提唱したと思われるが、その理由は不明である。青洲のモットーは「内外合一活物窮理」とされてきた。しかし「内外合一」は青洲の言葉ではなく、「活物窮理」だけが青洲の言葉である。青洲の師吉益南涯によれば、「物」とは気、血、水、で、これらが停滞すれば「毒」に変化して病気を引き起こすとした。したがって、「活物窮理」とは気、血、水を円滑に循環させることが、その人の生命を全うさせることになることを意味している。青洲は「麻沸散」の乱用を恐れ、その伝授に制限を加えた。青洲は医療において、「知」のみではなくて「術」の重要性をも指摘し、「術」を伝えることが出来ない著書の出版には消極的であった。医療の現場で、師や先輩の技を、積極的に、熱心に観察して「盗め」と教えた。青洲は弟子に与えた免状のなかで、このことを「得と不得はその人にあり」と教え諭した。現代でも通用する言葉であろう。（利益相反なし）